

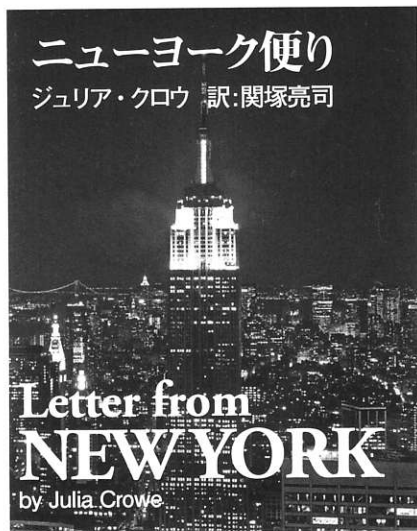


Strathprints Institutional Repository

Argondizza, Peter and Crowe, Julia (2013) *Letter from New York*. Classical Guitar. ISSN 0950-429X

Strathprints is designed to allow users to access the research output of the University of Strathclyde. Copyright © and Moral Rights for the papers on this site are retained by the individual authors and/or other copyright owners. You may not engage in further distribution of the material for any profitmaking activities or any commercial gain. You may freely distribute both the url (<http://strathprints.strath.ac.uk/>) and the content of this paper for research or study, educational, or not-for-profit purposes without prior permission or charge.

Any correspondence concerning this service should be sent to Strathprints administrator: <mailto:strathprints@strath.ac.uk>



●ピーター・アルゴンディッツア博士による「フリーランスの音楽家のための」講義

今夏、マンネスで開かれたニューヨーク・ギターセミナーにて、ピーター・アルゴンディッツア博士が、フリーランサーとして活動する音楽家の課題についての興味深い講義を、学生たちに対して行なった。

ネイティブ・ニュー Yorker である博士は、エール大学で音楽芸術博士号を取得した。現在、スコットランドのグラスゴーにあるストラスクライド大学で、ギター、音楽史、オーケストレーションといった幅広い講座を持つ指導者であるが、同時に、毎年開催されているビッグ・ギター・ウィークエンド・フェスティバルの創設者でもある。また彼は、王立スコットランド音楽院（旧：王立スコットランド音楽演劇アカデミー）においても、ギター、リュート、アンサンブル・パフォーマンス、音楽史、論文の書き方ならびに、和声、対位法、オーケストレーションといった作曲技法を教えている。その他、グラスゴーにあるダグラス・アカデミーという音楽専門家のための学校でも指導と個人教授を行なっている。

彼は講義の中で、音楽学校で正規の教育を受けソリストとして活動するギタリストが、フリーランサーとして直面する諸問題について、BBC 放送を含む数多くの大規模なアンサンブルやオーケストラと共演した、自身の経験に基づき解説した。

また、未熟なクラシック・ギタリストにとって、演奏の機会を得るための「より良い準備とは何か」を、専門的かつ実践的にアドバイスした。たとえば、レパートリーの決め方、諸準備の仕方、機材のこと、楽譜とパート練習などについて、滞りなく進めていくための秘訣を披露してくれた。

●アルゴンディッツア博士自身の経験

ニューヨークに住んでいた頃のアルゴンディッツア博士は、当時『ギタープレイヤー』誌に掲載されていた、ロサンゼルスでスタジオプレーヤーとして活躍するトミー・テデスコが、自らの作品について書いた記事を精読していたという。博士は以下のように述べた。

「テデスコは、バンジョーやギリシアのブズーキのようなエキゾチックな楽器を演奏するギタリストですが、ギターが弾けて、初見が得意なら、こうした楽器をギターと同じ「E-A-G-D-B-E」に調弦することができるのです。私もそれは知っていましたが、まさか、自分自身が職業としてそうした技を使い、役に立つ日が来るとは想像もしませんでした」

チェロ奏者であるアルゴンディッツア博士の夫人が、ロンドンでフルタイムの仕事を手に入れ、その後ロイヤル・スコットランド国立管弦楽団に職を得たので、2人はニューヨークを離れロンドンに転居することになった。

アルゴンディッツア博士は、この地でギター教師となり、フリーランスの仕事求めてオーケストラや放送局に対し積極的な接触を試みた。

「私は、BBC が、ストラヴィンスキーのバレエ音楽『アゴン』についての番組を制作しようとしているのを知りました。私は、この作品を音楽学部で学生時代に勉強していたので、作品の中でマンドリンが使われているのを思い出したのです。そこで、“マンドリンを弾く人が必要なのではないか？”と BBC 放送に電話することにしました」

BBC へ電話をしてみたところ、先方は彼に対し履歴書を提出するように求めてきた。アルゴンディッツアが博士課程を修了し、演奏家としての資格を得た

ところだったので、履歴書を見た BBC は、とりあえず彼を試してみようというオーディションに招くことにしたのである。

それと同時にアルゴンディッツア博士は、英国のミュージシャンズ・ユニオン（音楽家組合）にも加入した。というのも、BBC は演奏を一度きりしか放送しないことが多いので、実入りを良くするためには、ミュージシャンズ・ユニオンと契約することが必要だと指摘されたからだ。

ミュージシャンズ・ユニオンとの契約には、放送に際する演奏印税の受け取りについてのオプションが2種類あった。1つ目は、将来再放送された際の印税をあらかじめ買い取ってもらい、それを上乗せした金額を初回放送時に受け取る方法であり、2つ目は、現在の受け取り額が少なくても、将来印税を受け取れるようにする方法である。

「BBC の場合、再放送されるケースが少ないので、ほとんどの音楽家は最初のオプションを選択し、受け取る金額が多い方を選ぶのです」

フリーランサーとしてベストな音楽家になるには、いろいろな問題を自分で解決し、自らを状況に適合させる道を探す能力がなければならないことを、アルゴンディッツア博士は学んだ。

「フリーランサーというのは、オーケストラのメンバーではありませんが、レギュラー・メンバーと同じように優れた音楽家であることが求められます。

与えられた環境に適応する能力がなければいけません。それでも、あなたがアウトサイダーであることには変わりないのです。お互いを良く知り合っている家族が暮らしているような場所に、あなたは足を踏み入れるわけです。同時に、オーケストラのメンバーの誰よりも注目される立場にいます。なぜなら、あなたはギタリストですから他の人とは違うパートを演奏することになるわけです。それについては、ある程度自分がラッキーであり、良い第一印象をメンバーに対して与えることができると言うべきです。

フリーランサーとして活動するには、まず第一に、パーフェクトな演奏をする能力がなければなりません。そして、演奏団体の指導者やメンバーと良い人間関係を作り、仕事を得るために、あな



ピーター・アルゴンディッツァ博士

の履歴書を送ることができるかどうかの問題だと私は考えます。可能であれば、通常の音楽家にはできないような代役を経験してみるのもいいでしょう」

●フリーランサーに必要なもの

アルゴンディッツァ博士が経験し、苦労して解決しなければならなかった難題の1つに、ギター⑥弦の音を1オクターヴ低い音で演奏して欲しいという、作曲家からの不可能な注文があった。

「作曲家が、そんな要求をするので当惑しました。結局、私はアンプを使って深い低音を出しましたが、それに彼は満足したようでした。誰がやっても困惑するような無理難題でしたが、私は解決策を見つけないければならなかったのです」

もう1つのケースは、ある演奏会に起用されていた音楽家の代役をするように頼まれたことだ。イギリスでは、このことを「代役」"deputizing"といい、アメリカでは「代理」という意味で"subbing"という。

アルゴンディッツァ博士が、とある音

楽家の代役を求められたのは、スコットランド・オペラにおける演奏であった。

「もし、私をメインとしたリハーサルを認めてくれるのなら、代役に応じてもいいと相手に言いました。

私がそう要求した理由は、数年前、メイン奏者として起用されていた演奏家が、ほとんどのリハーサルに参加しながら、本番の演奏に來なかったというケースがあったからです。急遽代役を頼まれた私は、ぎりぎりのタイミングで、舞台稽古をしている間に膨大な譜面と格闘しなければならませんでした。しかも、その曲のキーは、ギターにとってとても弾きにくい調性でした」

とアルゴンディッツァ博士は語った。

「その時は何とか無事に終わったのですが、自分がどこに座っていたのか、ダンサーの動きがどうだったのか、まったく覚えていないのです。ですから、最初の何曲かの演奏は非常に緊張しました。

そうした経験から、リハーサルの重要性を学びました。少なくとも舞台稽古2回分のリハーサルと、裏方である技術担当者とのミーティング、自分がオーケストラピットのどこに座るのかを知る機

会を与えてくれるよう求めました」

「仕事を引き受けたとしても、何かまずいことが起ると、“あなたの準備が悪い”と責められるものです。歌手や指揮者の指示（きっかけ）が理解できないと、“あなたはこの仕事を引き受けるべきではなかった”と、彼らに言われます。しかし、このことから、自己主張の大切さを私は学びました。実は、彼ら自身が自分の求めているものがわからず、問題を解決するにはどうすればよいのかをあなたに求めてくることも、よくあることなのです」

ギタリストが大編成のアンサンブルと共演した場合に直面する、最も困難な問題として、アルゴンディッツァ博士が指摘しているのは、①アンサンブルの中で自分が音を出すタイミング、②指揮者に合わせる方法、③休みの小節の数の数え方、④指揮者の指示をフォローする方法である。

彼はフリーランサーとして、優秀な多くのギタリストが、クラリネットやヴァイオリンのような楽器を使って訓練を受けているのを目撃してきた。

「音楽的経験は貴重です。私は、修士号や博士号を取得するために、ジュリアーニの作品を演奏しレコーディングしたことがあります。しかし、イタリア・ロマン派音楽のスタイルを知らずにいました。オーケストラピットで《セビリアの理髪師》を毎日演奏し、ロッシーニを聴き、ロッシーニをリハーサルする機会を得るまで、自分が本当に音楽を理解していたとは思えないのです。

貴重な教育を受けるということは金銭には換えられません。どんな音楽的経験からも、何か学ぶものはあるものです。大きなアンサンブルと合わせるときには、よく聴き、それに協力するように適合していき、学生時代に学んだすべての技術を駆使して、それで生活していかなければならないのです」

アルゴンディッツァ博士は、先月、ロンドンの聖パンクラス教会でソロ・コンサートを開き、バッハの〈シャコンヌ〉、ベリオの〈セクエンツァ XI〉、アルベニスやヴィラ＝ロボスの作品を演奏した。2012年9月9日には、エジンバラにある聖ジャイルズ教会において同じプログラムを演奏することになっている。